



日本産タマムシ科解説 (6)

黒沢良彦

V. Subfamily Sphenopterinae マルタマムシ亜科

ユーラシア大陸とアフリカ大陸に極めて多くの種類 (1,100余種) があるが、大多数のものはただ一属 *Sphenoptera* Solier に含まれ、この他にはそれぞれ10種足らずの種類を含む3属があるだけである。元来、乾燥地の居住者で、中央アジア、シリア、アフリカなどの草原地帯に多くの種類があり、森林地方には少なく、大陸周辺の諸島にはごく僅かの例外的な種類を産するだけである。幼虫は草本植物の根茎部に侵入するものと考えられる。

13. Genus *Sphenoptera* Solier, 1833 マルタマムシ属

Sphenoptera s. str. (中国~地中海地方), (*Deudora* Jakovlev, 1899 (中央アジア~地中海地方), *Paradeudora* Obenberger, 1924 (北アフリカ, 近東), *Archideudora* Obenberger, 1926 (アフリカ南部), *Rhaphidochira* Jakovlev, 1900 (中央アジア), *Chrysoblemma* Jakovlev, 1899 (蒙古, 中国西部~地中海地方), *Chiloblemma* Obenberger, 1926 (中央アジア, コーカサス), *Chilostetha* Jakovlev, 1889 (中国, 満洲, シベリア東部~地中海地方), *Chilostethura* Obenberger, 1926 (南アフリカ), *Hoplistura* Jakovlev, 1899 (中国南部, インド~アフリカ, 地中海地方), *Tropeopeltis* Jakovlev, 1901 (インド, 中央アジア~小アジア, アフリカ), *Tropeoblemma* Obenberger, 1926 (アフリカ東部), *Buprestochila* Obenberger, 1926 (南アフリカ), *Strobilodera* Fairmaire, 1884 (アフリカ中東部) などの亜属に分けられ、上記のように1,100余種を含むが、ツヤタマムシ属 *Psiloptera* と同様に、この中の幾つかは独立の属として取扱った方がよいのではないかと考えられる (例えば, *Hoplistura*, *Tropeopeltis* など)。

以上14亜属の中で、極東地方にまで分布が延びて来ているものは、*Sphenoptera*, *Chrysoblemma*, *Chilostetha*, および *Hoplistura* の4亜属で、前

3者が中央アジアから中国に達しているのに反し、後者はツヤタマムシ属 *Psiloptera* のツヤタマムシ亜属 *Lampetis* と同様にアフリカで最も繁栄し、その一部がインドを経て中国南部に及び、更にその一部は海南島やアンダマン諸島にも及んでいる。日本付近では *S. (Chilostetha) forceps* Jakovlev, 1908が満洲 (遼東半島を含む) からバイカル地方、蒙古、華北にかけて産するが、朝鮮半島からは現在本属の種類は1種も記録がない。日本からも同様であるが、私の手許に長野県上高地というラベルのついた *S. (S.) extensocarinata* Jakovlev, 1889と思われる1頭の標本がある¹⁾。しかしこの種類は中国中北部から蒙古を経てバイカル地方にまで分布する種類で、果して日本に産するかどうか極めて疑わしい。

VII. Subfamily Buprestinae クロタマムシ亜科

ハワイ、ニュージーランドを含む南太平洋の諸島と極地を除くほとんど全世界に産する。中型種と小型種を多く含み、次の3族に分けられる。

1. — 後胸後側板の一部は腹部第1節の側部延長により覆われる C. Anthaxini
— 後胸後側板は全く覆われることがない 2.
2. — 両複眼は明らかに頭頂に向け収斂する A. Dicercini
— 両複眼は平行、またはごく僅かに上方に向け収斂する B. Buprestini

A. Tribe Dicercini フタオタマムシ族

エチオピア区を除くほとんど全世界に約20属を有するが、不思議にエチオピア区、マダガスカル、および南米のブラジル山地には全く産しない。

本族は、前述した、ウバタマムシ亜科のツヤタマムシ族に形態が酷似していて、触角の構造以外に両

1) 1♀, 長野県上高地, 7. viii. 1940, M. yasuda 採集

者を分ける顕著な特徴がない。従って、ソ連の Richter のように両者を合せて、Capnodini と云う族を創設する人もある。

しかし、フタオタマムシ族は総北区に分布の中心があり、1部はマレー諸島沿いに南下して、ニューギニア、ソロモン諸島、ニューカレドニア、フィジーに及び、更にオーストラリアの東岸を南下して、南米のアンデス山地の中南部に現れる。これは南極大陸を経て南米に達したものと考えられ、中米を経て南米に入ったものではない。一方、ツヤタマムシ族はその項でも述べた通り、南米のブラジル楯状地とアフリカ大陸を分布の中心として、一部は中央アジア、インドからインドシナ半島に、他は南米北部、中米を経て北米南部に至っている。これから判断すると、ツヤタマムシの分布の中心は Gondwana 大陸にあり、フタオタマムシ族のそれはアンガラ大陸にあるように思われる。従って、両者は大西洋の形成される以前に分離されていたものと考えられ、両者を同一視するのは無理があると考えられる。

日本には次の4属を産する。

1. — 後附節第1節は第2節と等長またはこれよりごく僅かに長い。小楯板は円く小さく、翅端は多少共尾状に延長する……………14. *Dicerca* Eschscholtz, 1829
— 後附節第1節は第2節より明かに長い、小楯板と翅端の形は一定しない……………2.
2. — 後胸腹板中央部および腹部腹板第1節の中央に太い縦溝がある。翅端は多少共尾状に延長する……………15. *Poecilnota* Eschscholtz, 1829
— 後胸腹板中央部および腹部腹板第1節の中央部は平坦またはやや中高、翅端は全く尾状に延長しない……………3.
3. — 附節は短太、中附節第1節は第2節と等長またはこれよりごく僅かに長く、後附節第1節は第2節の長さの1.5倍以下。体は短太でやや中高、翅鞘に数間室に亘る大きな黒藍色紋がある……………16. *Ovalisia* Kerremans, 1900
— 附節は細長、中附節第1節は第2節より明かに長く、後附節第1節は第2節の長さの1.5倍以上。体は細長でやや扁平、翅鞘の黒藍色紋は細かく、2間室以上に亘ることは少ない……………17. *Scintillatrix* Obenberger, 1956

14. Genus *Dicerca* Eschscholtz, 1829 フタオタマムシ属

総北区に分布し、78種を含むが、北米に最も種類が多く、東亜には5種、日本にはその中の2種を産するに過ぎない。

1. *D. furcata* (Thunberg, 1787) フタオタマムシ 分布：日本（北海道）、樺太、朝鮮、満洲、シベリア、ヨーロッパ（東北部）。以前は *D. acuminata* Pallas, 1782 を種名として使用していたが、この名はホモニムで使用出来ない。樺太と北海道産は大陸の原亜種に比べ、体が頑強で、点刻が粗大、

前胸背の側縁が中央部で強く膨出し、後脛節の彎曲が弱いなどの点で異り、亜種 *aino* Lewis, 1892 として区別される。これは独立種として記載されたものであるが、上記の点では種を分ける程の特徴とはならない。成虫はヤナギ類、ナラ類、シラカバなどの枯木や薪に見出されるが、幼虫の確実な記録はない。

2. *D. tibialis* Lewis, 1892 トゲフタオタマムシ 分布：日本（本州、四国、九州）。関東地方西南部の山地から西の低山地に見出されるが、一般に稀である。東京、神奈川、静岡、奈良、和歌山、愛媛、鹿児島等の諸都県から記録があるが、いずれも表日本からの記録ばかりで、裏日本からの記録はない。中国の福建省から記載された *D. latouchei* Fairmaire, 1899 も、その記載から判断すると、本種と同一種かも知れない。

和名の基になった、雄の中脛節の中程の内方にある鋭い棘は本種だけのものと考えられ易いが、フタオタマムシにもより鋭く長い棘がある。ただ、この棘は本属のどの種にもあるわけではなく、歯状突起であったり、全く無かったり、種によって一定していない。有害植物はスギ、モミなどの針葉樹と推定される。

近隣から知られる本属の種類に、*D. amphibia* Marseul, 1865 カラフトフタオタマムシ（樺太、シベリア、ヨーロッパ東部）、*D. corrugata* Fairmaire, 1902 タイワンフタオタマムシ（台湾、中国南西部、北ヴェトナム）、*D. aenea chinensis* Obenberger, 1929 オオフタオタマムシ（満洲、中国北部。原亜種はヨーロッパ、北アフリカ、シベリア）などがある。以前²⁾私が中国の山東省から記録した *D. moesta* (Fabricius, 1793)（ヨーロッパ中東部）はどうやらラベルの付け誤りらしいので、東亜のファウナからは一応除外した方がよいと考える。

15. Genus *Poecilnota* Eschscholtz, 1829

コモントタマムシ属

一見フタオタマムシ属に似ているが、後附節第1節が長く、前胸背の中央に隆条があり、溝がない点で区別される。フタオタマムシ属と同様に総北区に13種を産するが、東亜には2種を産するだけである。

1. *P. chinensis* Théry, 1926 クロコモントタマムシ 分布：中国（北部）、満洲、日本（北海道、本州）。

中国の北京から記載された種類であるが、ヨーロッパからシベリアにかけて分布し、幾つかの亜種に分けられている。*P. variolosa* (Paykull, 1799) の代替種であると考えられる。幼虫は各種のドロノキ属の植物の樹幹に被害するが、ヤナギ属に被害する例はまだ知られていない。

日本には次の2亜種を産する。

2) Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo, (34), p. 32 (1954)

a. subsp. *cupreomaculata* Miwa & Chûjô, 1935 分布：日本（北海道，本州）。北海道札幌で採集された1頭（♀？）に基いて独立種として記載されたものであるが、私はこれを原亜種と同じものと見做し³⁾、関西地方のものを別種として記載した。しかし、最近岩手県で採集された⁴⁾1♀を検査することが出来たが、これは大陸の原亜種とは区別出来る特徴を持っているので、北日本のものは別亜種として区別してもよいと思う。

b. subsp. *yanoi* Y. Kurosawa, 1962 (ヤノコモンタマムシ) 分布：日本（本州）。

本亜種も三重県産1♂に基いて独立種として記載されたものであるが、其後、若干の標本を検した結果、やはり *chinensis* の亜種と見做す方が妥当であるとの考えに達した。北日本産に較べ、翅鞘間室の隆起がさらに強く、翅端は弧状に割られるなどの点で異なる。「三重県」と称する模式標本以外に、最近になって、奈良市と神戸市有馬温泉でそれぞれ数頭ずつ採集されている。或いは、将来関東、中部地方で本種が発見されれば、両亜種は連続するかも知れない。有馬産のものはポプラの幹から採集された。

16. Genus *Ovalisia* Kerremans, 1900 クロホシタマムシ属

地中海地方、中近東、ヒマラヤから東はビルマ、中国を経て満洲、アムール地方、朝鮮、日本へ、一方では中国から台湾を経てフィリピンへ、さらに他の大きな流れはアッサム地方、ビルマからインドシナ半島全域に及び、マレー半島を経てスマトラ、ボルネオに達している。しかし、ジャバ以東のスンダ列島には記録がない。

本属は従来次のキンヘリタマムシ属と区別されることなく、唯一の属 *Lampra* Lacordaire, 1835 に入れられていたが、キンヘリタマムシ属とは検索表に記した特徴で明かに区別出来る。本属の模式種はソロモン群島の Tugela 島産と称する *O. insularis* Kerremans, 1900 であるが、この種は現在、マレー半島に産する *O. auricollis* H. Deyrolle, 1864 のシノニムではないかとされている。しかし、ジャバ以東には及んでいない本属が、突然ソロモン群島に現れるとは考えられないので、若し *insularis* が確かにソロモン群島産であるならば、*insularis* を模式種とする *Ovalisia* はクロホシタマムシ類とは異なる属である可能性が強い。この場合には、クロホシタマムシ属の属名としては地中海地方に広く分布する *Lampra festiva* (Linné, 1758) を模式種とした *Palmar* Schaefer, 1949 が復活する。

日本には次の3種を産する。

1. *O. davidis* (Fairmaire, 1887) タイワンク

3) Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo, 6, p. 90(1962)

4) 1♀, 岩手県稗貫郡大迫町立石(21. vi. 1969, 佐々木ふさ子採集)。この産地は早池峯山の南麓である。

クロホシタマムシ 分布：日本（九州，屋久島），琉球（奄美大島），中国（中南部），台湾。福建省から記載された種類で、台湾と日本産はそれぞれ別亜種に属する。

a. subsp. *intermedia* (Y. Kurosawa, 1956)

鹿児島，天草島富浦，島原半島口之津，福岡県玄海島，屋久島粟生，奄美大島名瀬（新記録）など主として海岸地方で採集されている。幼虫はスギ，ヒノキに加害するらしい。

b. subsp. *igneilimbata* (Y. Kurosawa, 1948)

台湾の山地に産するもので、日本産のマスダクロホシタマムシ *O. vivata* Lewis の亜種として記載したものであるが、1956年に独立種にすると共に、日本からその亜種 *intermedia* を記載した。しかし台湾のものは福建省から記載された *Lampra davidis* Fairmaire, 1887 と同一種と考えられるので、種名に *davidis* を用い、台湾産と日本産をそれぞれ別亜種としたい。この扱いは大陸産の真の *davidis* とその近似種 *kheili* Obenberger, 1925 の標本を検していないので、将来変更されるかも知れない。

2. *O. vivata* (Lewis, 1892) マスダクロホシタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州，屋久島）。中国，インドシナ半島，台湾などに多くの近似種があり、地中海地方に産する *O. festiva* (Linné, 1758) も本種に近い。故鹿野忠雄博士は、故松村松年博士が次種を本種と感違いして図示されたのをそのまま信じて、Lewis の原記載を調べることもなく、本種を新種と断断して *masudai* と命名した。従って *masudai* Kano, 1929 は当然 *vivata* Lewis, 1892 のシノニムとなるが、本種をクロホシタマムシとすると、久しく次種を「クロホシタマムシ」と称して来た習慣に混乱を来すので、私は本種には *masudai* の和名マスダクロホシタマムシを残し、次種には従来クロホシタマムシを残した⁵⁾。幼虫はスギ，ヒノキの樹皮下に加害する。

3. *O. virgata* (Motschulsky, 1859) クロホシタマムシ 分布：日本（北海道，本州，九州），朝鮮，満洲，シベリア東部，中国北部。跗節や小楯板の構造は次のキンヘリタマムシ属に似ていて、クロホシタマムシ属とキンヘリタマムシ属を結ぶ位置にある。また分布も本属の中では北に偏し過ぎている。日本産のものは翅端の形などが朝鮮やシベリア産の基本種とは多少異り、むしろ中国の *O. subangulosa* (Fairmaire, 1889) に似ている。幼虫はナラ，クリなどブナ科の枯材に食い入るものと思われる。

17. Genus *Scintillatrix* Obenberger, 1956

キンヘリタマムシ属

従来クロホシタマムシ属と共にヨーロッパ産の *Buprestis rutilans* Linné を模式種とする属 *Lampra* Lacordaire, 1835 を創っていたが、この

5) 昆虫世界, 第50巻 573号, p. 3 (1947)

属名は鱗翅目ヤガ科の属 *Lampra* Hübner, 1816 により先占されているので, Obenberger は1956年にキンヘリタマムシ属に上記新名を提唱した。

ヨーロッパから中央アジアにかけての地域に13種, 極東地方に23種を産するが, その中間のヒマラヤ, チベット, 新疆, シベリア中部などには不思議にも1種も産しない。

この属の各種は互に酷似した色彩と形をしている上に, 各種の変化傾向も共通しているもので, 中型のタマムシの中では分類に最も困難する一群である。従って, 種類数も将来多少増減するかも知れない。各種共原則として金緑色の地に両側は金橙色に縁取られるが, 時に, 翅鞘側縁の金橙色部が褪色し全く緑色になったもの (A型), 背面青色または青藍色になり金橙色部が緑色になったもの (B型), および全体が一様に橙赤色, 暗紅色, 鉄錆色などになったもの (C型) などの変化が現れる。

日本には次の4種を産する。

1. *S. bellula* (Lewis, 1892) キンヘリタマムシ 分布: 日本 (北海道, 本州)。北海道では少なくないが, 本州では少なく, 岩手県と福島県から記録されている。B型を var. *ogumai* (Y. Kurosawa, 1953), C型を var. *hasegawai* (Y. Kurosawa, 1953) と云う。幼虫はハルニレに加害する。なお本種は次種に最も近く, その亜種とされることもある。

2. *S. pretiosa* (Mannerheim, 1852) キュウシュウキンヘリタマムシ 分布: 日本 (九州), 朝鮮, 満洲, 蒙古, シベリア東部。前種によく似ているが, やや扁平で, 腹端の割れの形が異なる。A型を var. *hochhuti* (Obenberger, 1951), B型を var. *nobilissima* (Mannerheim, 1852) と云うがC型の記録はない。日本産は次の亜種に属する。

subsp. *inexpecta* (Y. Kurosawa, 1953) 分布: 日本 (九州)。大分県祖母山で採れた1♀に基いて

記載したものであるが, その後の記録を知らない。大陸産の原亜種とは前胸背の形が異なる。

3. *S. kamikochiana* (Obenberger, 1940) エサキキンヘリタマムシ 分布: 日本 (北海道, 本州)。本州の深山と北海道の中南部の山地に産する。B型とC型があり, 後者を var. *esakii* (Y. Kurosawa, 1953) と云う。幼虫はヤナギ類を食べるが, ミヤマハノキにもつくらしい。本種は朝鮮, 満洲, ウッスリーなどに分布する *S. tschitscherini* Semenow, 1895 に最も近く, 恐らくはこの種類から分化したものであろう。

4. *S. chinganensis* Obenberger, 1940 ハビロキンヘリタマムシ 分布: 日本 (本州), 朝鮮, 満洲, ウッスリー。キンヘリタマムシ属の中では特異な種類で短太, 触角の比が他種と異なる。B型を var. *sevastjanovi* (Obenberger, 1951) と云う。日本産は大陸産と異り, 次の亜種に属する。

subsp. *nipponensis* (Y. Kurosawa, 1953)

大陸産とは前胸側縁後方に金橙色部の現れることと, 前胸背の側縁の膨出が強い点で区別される。極めて稀な種類で, 岩手県で1♂, 群馬県で1♀が採集されただけである。

なお極東地方の本属の種類は前述の通り23種もあるので, 全部を紹介することが出来ないが, 樺太には1種も産しないのに, 朝鮮には *S. limbata* (Gebler, 1832), *pretiosa* (Mannerheim, 1852), *djingischani* (Obenberger, 1951), *chinganensis* (Obenberger, 1940), *suayfunensis* (Obenberger, 1934), *rambouseki* (Obenberger, 1929), *suwovi* (Obenberger 1934) など7種を産し, 満洲や中国にもさらに多くの種類があり, 台湾にも中国の北京から記載された *S. provosti* (Fairmaire, 1887) と同じ種類を産する (新記録)。

(国立科学博物館)

○*Apotomopterus* 属2種の採集記録

1. アオオサムシ *A. insulicola* Chaudoir, 1♂6♀, 東京都三頭山 (1,527 m) 山頂付近, 7~14. ix. 1969.

尾根筋にかけたトラップに来た。

2. オクムラクオオサムシ *A. ablechti okumurai* Ishikawa, 2♂1♀, 群馬県吾妻郡嬭恋村千俣, 29. vii. 1969.

このうち1♂1♀は亜種 *freyi* への移行を示している。おそらく本亜種の分布の北限に近いであろう。

終りに, 同定して頂いた奥村尚氏に感謝します。
(横浜市南区 蕭 嘉広)

○カミキリ採集記録

(1) アカムネハナカミキリ *Macropidonia ruficollis* Pic 入笠山の標高約1,000 m の所を飛翔中の1雌を採集。12. viii. 1965. 採集者 渡辺昌久 標本は採集者蔵 (静岡県磐田市)

(2) ヒゲナガヒメカミキリ *Cerecium longicorne* Pic 沼津市西浦のミカンの葉上にて4頭。27. vii. 1969. 採集者 大庭俊司 (静大・農・3年)

(3) タニグチコブヤハズカミキリ (南ア亜種) *Mesechthistatus taniguchii* Seki 山梨県檜形山, 標高約1,900 m の所の直径80 cm 位の切株で1頭採集。東限の記録ではないかと思う。採集者 大庭俊司。

(4) シラオビドイカミキリ *Doius adachii* Hayashi 檜形山, 標高約1,800 m から2,000 m の間のカラマツの生木の枯枝を叩いて4頭採集。5. 6. viii. 1969. 採集者 大庭俊司, 草間慶一。

(5) クロホソコバナカミキリ *Necydalis harmandi* Pic 檜形山, 標高約1,500 m のノリウツギの多い伐採地で飛翔中の1雌を採集。附近にはダケカンバの林が取り巻いている所。7. viii. 1969. 採集者 草間慶一。 (静岡市大谷 草間慶一)

○クロナガオサムシ類の混棲

一越後のオサムシ覚え書 (4)一

新潟県のクロナガオサムシ類について、馬場(1966)は“県北部ではホソクロナガオサ (*C. exilis tenuiformis*) が、南部ではアキタクロナガオサがそれぞれ独占的に分布する”と述べ、中部はその混淆地帯であるとして雲崎峠における両者混棲の1例を報じた。しかしこうしたこの類の混棲は、さして珍しいことでもないらしく各地に見られるが、手許にあるデータによって下記の諸例を報告する。

1) 新発田市五十公野山 (岩井戸附近), 1858年12月8日。

クロナガオサ (*C. procerulus*) 1♀及びトウホククロナガオサ (*C. exilis parexilis*) 5頭。

この山では後者はかなり産するが、前者は稀で、1967年2月28日にも前者1♀と後者3頭を掘った。

2) 三条市月岡山, 1966年2月19日。

クロナガオサ5頭, アキタクロナガオサ (*C. porrecticollis porrecticollis*) 6頭。

ここでは1967年2月11日にも前者1♀と後者5頭を掘っている。

3) 新発田市上赤谷, 1967年9月24日。

トウホククロナガオサ18頭及びアキタクロナガオサ43頭。

ここでは翌年10月20日にも前者6頭及び後者11頭を採っているが、後者の方がかなり優勢と

目される。

4) 南魚沼郡六日町坂戸山, 1968年11月15日。

アキタクロナガオサ8頭, クロナガオサ4頭。

僅か数時間の調査であったが結果は上記のとおりである。なお、ここのマイマイカブリは *oxuroides* と目される前胸等の青いものであった。

5) 新発田市焼峯山, 1969年11月30日。

アキタクロナガオサ26頭, クロナガオサ7頭。

この山のアキタは初めて記録されるものであるが、ここではいずれも朽木中の同一越冬窩に越冬中の

アキタクロナガオサ1♂+クロナガオサ1♀。

アキタクロナガオサ1♀+クロナガオサ1♂。

アキタクロナガオサ2♀♀+クロナガオサ1♂。という三つの組合せを発見したことを特記したい。

6) 新発田市滝谷, 前同日。

クロナガオサ11頭, アキタクロナガオサ3頭及びアオオサ12頭。

なお、新潟県北部の *C. exilis* は、飯豊山の高地産のものも含め真の *ssp. tenuiformis* とはかなり異り、大型で本誌第3号に黒沢氏が記された山形県のそれと同一であると考えているが、ここでは一応 *ssp. parexilis* として扱った。

(新潟県新発田市 小池 寛)

舩倉島の甲虫類 (1)

大野 正男

舩倉島は能登半島輪島市の沖合 50 km の日本海上に位置する周囲 4 km ばかりの小島嶼である。島は小さいながら本土からの距りが大きいので、生物地理学上注目されて然るべきであるが、地勢が極めて単調で、最高地点でも 15 m に満たないというこのために、従来、積極的にこの島を調査する人は少なかったようである。そのような関係からであろう、この島のファウナを扱った報文はほとんどなく、甲虫類にあつては僅か9種 (ヒメカメノコテントウ, ナナホシテントウ, ヒメサビキコリ, トビイロクシコメツキ, アカアシクシコメツキ, ウスケゴモク, マメコガネ, クロコガネ, ハスジカツオゾウ) の産が知られているにすぎなかった¹⁾。

そこで筆者は1968年7月にこの島に渡り、21日と22日の2日間滞在し、ハムシ科甲虫を中心に昆虫、クモなどの分布生態調査を試みた。調査結果のうちハムシ類については既に報告しておいたので²⁾、ここではハムシ科以外の甲虫類についてかんたんに報告しておくことにする。なお、同定未了のコメツキ, ゾウムシ, ハナノミ, その他については次回報告にゆずる。種名の次の () 内の数字は採集個体数を示す。

1) 金沢大学・北国新聞社自然科学調査団 (1961) 舩倉島・七ツ島, pp. 1~152 (北国新聞社)

2) 大野正男 (1969) 舩倉島のハムシ相, 採集と飼育, 31 (4), pp. 80~88

Harpalidae ゴミムシ科

1. *Chlaenius posticalis* Motschulsky キボシアオゴミムシ (1)

Coccinellidae テントウムシ科

2. *Harmonia axyridis* Pallas テントウムシ (3)

3. *Propylaea quatuordecimpunctata* Linné ヒメカメノコテントウ (2)

Tenberionidae ゴミムシダマシ科

4. *Plesiophthalmus nigrocyaneus* Motschulsky キマワリ (1)

5. *Strongylium apterum* Nomura et Yamazaki ハネナンセスジキマワリ (10) (舩倉島で得た本種10頭は後翅が残存し、その長さは翅鞘の $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{2}{3}$ に達していた)

6. *Tetraphyllus lunuliger* Marseul ニジゴミムシダマシ (1)

Oedemeridae カミキリモドキ科

7. *Eobia chinensis* Hope ツグロカミキリモドキ (1)

8. *E. cinereipennis* Motschulsky ハイイロカミキリモドキ (7)

両種ともカラスウリの花に多かった。

Cerambycidae カミキリムシ科

9. *Anoplophora malasiaca* Thomson ゴマダ
ラカミキリ (1)

Scarabaeidae コガネムシ科

10. *Maladera orientalis* Motschulsky ヒメビ
ロウドコガネ (1)
11. *Lachnosterna kiotosensis* Brenske クロコガ
ネ (1)
12. *Popilia japonica* Newmann マメコガネ (2)
13. *Anomala testaceipes* Motschulsky スジコ
ガネ (3) (本種は島に植栽されたクロマツにかな
り多く、子供たちは本種をマツムシと呼び捕獲し
て遊んでいた)
14. *Protaetia orientalis* Gory et Percheron
シロテンハナムグリ (1)

(埼玉県鶴ヶ島町)

○新潟県のクロナガオサムシ

一越後のオサムシ覚え書 (5)一

新潟県のクロナガオサ (*C. procerulus pro-*
cerulus) は中根によって記録され、その後馬場は
“漸く確実な産地を発見した”として奥只見の枝折
峠及び笹ヶ峰牧場から火打山への一帯をあげた。筆
者の手許には下記各地の標本があり、県内各地にか
なり広く分布するものと思われる。

南魚沼郡六日町坂戸山。三条市月岡山。南蒲原
郡下田村鹿峠。新発田市下寺内、上石川、下石川、
水谷沢、五十公野山、焼峯山。

因みに上記のうち六日町産以外はかなり大型で、
体長は♂で 30 mm 内外、♀では 37 mm の個体も
あることを附記する。

(新潟県新発田市 小池 寛)

○クロスジチャイロテントウ伊豆半島に産す

クロスジチャイロテントウ *Micraspis kioto-*
ensis (Nakane et M. Araki) は、1960年、京都
を基産地として記載された種類であるが (*Verania*
属として。原色昆虫大図鑑甲虫篇にも *Verania* の
学名で図示されている)、アフリカ、熱帯アジア、
ニューギニアなどに分布する *Micraspis lineata*
(Thunberg) に酷似する熱帯色の強いテントウム
シの1つである。また、今日までに知られた産地も
あまり多くなく、基産地の京都以外には兵庫 (西
宮)、大分 (久住山) などを挙げることができるく
らいである。したがって本種は、本邦産テントウム
シ類の中では極めて珍しい種類に属するといっ
て差し支えないであろう。

筆者は1956年5月4日、伊豆半島の天城山にて本
種1頭を採集したことがある (標本筆者所蔵)。黄
褐色の地にしるされた3本の黒条は極めて印象的
である。一見ヒメカメノコテントウの異常型のような
感もあるが、よく注意して眺めてみると形態的に全
く異なるので、採集当時から気になっていた種類で
ある。

古い採集記録ではあるが、伊豆半島は本種の産地
としては興味ある場所と考えられるので、ここに分

布資料として報告しておくことにする。

(埼玉県鶴ヶ島町 大野正男)

○トゲヒラタハナムグリ九州に産す

トゲヒラタハナムグリ *Dasyvalgus tubercula-*
tus Lewis は従来九州から未記録のものであるが、
筆者は最近下記の標本を検査することが出来たので本
種が九州に産することを報告する。

1. 1♀, 熊本県上益城郡内大臣, 18. V. 1969, 松
岡徹。
2. 1♀, 祖母山, 29. vii. 1969, 直海俊一郎。
3. 1♂, 熊本県下益城郡二本杉, 29. vii. 1969,
太田恭司。
4. 1♂, 熊本県下益城郡二本杉, 29. vii. 1969,
直海昌二郎。
5. 3♂祖母山, 24. vii. 1953, 木元新作。
6. 1♂, 祖母山, 6. vii. 1955, 三宅義一。

なお1および2の標本は、三宅義一氏に同定して
いただいた。その際、同氏と木元新作氏の未発表の
採集記録 (標本は同氏所蔵) についても、あわせて
発表することを許された。標本を同定して下さり、
記録の発表を許された三宅義一氏をはじめ、最近の
記録の発表を許された直海俊一郎、同昌二郎、太田
恭司、松岡徹の諸氏に感謝する。

(熊本市 大塚 勲)

○御蔵島のオオヒラタエンマムシ

御蔵島の昆虫相については、沢田玄正・渡辺泰明
両氏によって詳細に報告されている (農学集報, 14
巻1号, 1969) が、エンマムシ科は意外に少なく、
わずかにキノコアカマルエンマムシただ1種に過ぎ
ない。私は1967年5月に渡辺泰明・高橋慶二郎両氏
と共に同島に渡った際に、オオヒラタエンマムシ
Hololepta amurensis Reitter を1頭採集してい
るので記録しておく。

1頭, 御蔵島川田, 18. v. 1967, 川田の発電小
屋付近で枯枝に止っているのを捕えたものである。
(東京都世田谷区 黒沢良彦)

甲虫談話会

会費 (1カ年) 500円, 第9号は3月末発行予定,
投稿メ切は2月28日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園
国立科学博物館動物研究部内
電(282)0111, 振替東京60,664

ニューギニア産甲虫類 (コガネムシ, クワガタ
ムシ, カミキリムシ, ゾウムシ, 其他) が多数入
荷しています。御希望の方は返信料御封入のうえ
価格表を御請求下さい。

東京都練馬区石神井局私書箱2号
大蔵生物研究所